

百歳以上人口9万526人に思う

厚生労働省は9月16日、今年2022年の百歳高齢者表彰を受けた人は4万5141人で、敬老の日（9月15日）現在で百歳以上の高齢者人口は9万526人になったと発表した。正確には今年度中に百歳に到達あるいは到達する見込みの人をカウントしている。9月15日を「敬老の日」と定めた老人福祉法が制定された昭和38（1963）年の百歳以上人口は153人に過ぎなかった。その後、昭和56（1981）年に1000人を超え、平成10（1998）年に1万人を超え、平成24（2012）年に5万人を超え、その後10年で9万526人になったわけだ。お

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

めでたいことだといふべきだろう。また、百歳以上の高齢者のうち、女性が8万161人で全体の約9割を占めている。今回、百歳表彰を受けた人でも女性が86%、男性が14%と、女性が長寿だという傾向は変わらない。

ちなみに、昭和38年の日本人の平均寿命は男性が67・21歳、女性が72・34歳だった。それが今年7

月の厚生労働省発表によると、2021年の日本人の平均寿命は男性が81・47歳、女性が87・57歳となっている。これまで延びていた平均寿命が減少に転じたことについて厚生労働省は、男女とも新型コロナウイルス感染症などの影響で前年よりわずかに下回ったとしている。とはいえ、60年弱の間に男性が14・36歳、女性では15・23歳も平均寿命が延びている。

昭和38年といえば1963年であり、僕は当時中学3年で東京オリンピック開催の前年だった。日本は60年代初頭から始まる高度経済成長の真つ只中で、公害や成長期の産業転換による労働争議などもあったものの、日本社会は確実に豊かになっていった。家庭電化製品の普及による家事労働や農業を含む各種産業での機械化の進展など労働環境も改善された。さら

に、僕の小学生時代には少なからぬ日本人はお腹に寄生虫を宿しており、マッチ箱にウンコを詰めて学校に持っていき、虫がいると見なされた生徒は虫下し（駆虫薬）を渡された。戦後まもなく結核は死病ではなくなり、小児麻痺とい

われたポリオ、赤痢、日本脳炎、その他様々な病気も予防接種の普及や医療技術の進歩によってほとんど耳にすることがなくなった。僕の母は腎臓疾患で亡くなったが、今であれば人工透析を受けられたはずだ。医療体制そのものが改善された。かつては死亡宣告と同様だったガンも今では驚くほどの治癒率になっている。さらには、遺伝子組換え技術による様々な薬や治療法の開発により、多くの難病も治療が可能になっている。下水道をはじめとする環境インフラの整備も日本人の寿命を延ばす要因なのだろう。

これほどに日本人が長生きするようになったにもかかわらず、あいかかわらず農業や遺伝子組換え技術の危険性を語り、人々に不安をまき散らす人々がいる。彼らは百歳を超える高齢者人口の数字をどう評価するのだろうか。

高齢化社会で世界のトップを走る日本。圧倒的な人口比率を誇る僕自身を含めた団塊の世代もこれまでと同様に百歳高齢者表彰を受けさせてもらえるかはやや不安を残すところである。邪魔にされぬよう、若者の活躍を支援する取り組みを心がけたい。